本編の一部を体験版用に編集した、体験版ファイルになります。

アナルビーズ綱引き０３６番戦

ステージ上で解説をする司会の声が、私たちのいる待機場所まで聞こえてくる。

これからこの奴隷達に、一対一でアナル綱引きをさせるのだと言う。

ステージ上の奴隷少女は、手足を折り曲げられ、四つん這いにされたヒトイヌ状態で台車に乗せられる。

そして、唯一肌が露出しているアナルに、１０連のビーズを挿入される。

ビーズの数は全て１０連と決まっているが、大きさは牝豚のアナルごとに異なり、ピンポン玉くらいのビーズの娘も挿れば、こぶし大の大きなビーズを挿れられている娘もいた。

もちろん目隠しを兼ねた全頭マスクのせいで、私にはその様子は見えないのだけれど…。

「ひぐっ、無理…無理です、そんな大きなの入らないぃぃ……」

『おぉっと、小柄な少女の尻穴にたいして直径８ｃｍの１０連ビーズは厳しすぎるかぁ！？いやぁイッた、力任せに一気にいきましたぁ！』

「ひぎいいいいぃぃぃぃぃぃぃーーーーーーーッ！！あぁぁ――――――ッ！！――――――ッ！！……んお……ッ……おぉ……っぅ……」

『入りきりました、腸内が破れそうなほどの強引な挿入でスーツ越しにもお腹がボコボコに膨らんでいるのが見えます！小さなお腹が卑猥に膨らむ様子に、会場は大興奮だぁ！』

と、奴隷少女達の悲惨な状況を逐一実況されるので、嫌でもその姿が目に浮かぶ。

それに、数分後か数十分後か分からないが、遠くない未来に同じような目に合う自分の姿も想像してしまい、宙に吊られたままむき出しにされた尻穴が疼く。

『ケツをつき合った２匹の牝豚。それぞれの尻から伸びるビーズの先端が、フックで結ばれます！さぁ勝負開始だッ！用意はいいかぁ！さぁ思い切りアナルビーズを引いてぇ！スタートぉ！！』

司会の合図とともに、ステージに上った牝豚奴隷達は、折り曲げられた手足で必死に踏ん張ってアナルビーズを引きあう。

「ふおぉぉぉーーーーーっ！んふうぅーーーーーーッ！！」

「くうぅーーーーーー！んっ、んっ、ぐうううぅーーーー！！」

二人の少女が、ペットのようにボディハーネスをつけられた無様な四つん這いでうめき声を上げながらアナルを締めて連結したアナルビーズを引き合うんだ。

１０個ものビーズが腹の中に収まっているので、尻の中で生まれる摩擦はものすごい。

そのため初めのうちはなかなかビーズが出てこずに、膠着状態に陥ることもしばしば起こる。

そういうときは、ぴっちりスーツの上から尻や背中、太腿を打つように鞭が放たれたり、手足に電流が流されたりして、言うことを聞かない家畜を無理やり動かすのと同じように急かされる。

それでも決着がつかないと、最終的にはそれぞれの奴隷を乗せた台そのものが自動的にお互い離れる方向へ動きはじめ、一つの試合は長くても数分以内に決着する。

「ほおおおおぉぉーーーーーーーーー」

「｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜ッ！！」

『そこまで！勝者牝豚００３番！』

痛みで急かされ、無理矢理身体を前に引っ張られ、尻穴をビーズに摩擦され、排泄快感を味合わせられる。勝った少女も負けた少女も息絶え絶えだ。

どちらも相当無様なイキ顔、アヘ顔を晒していることだろうが、全頭マスクを外されてその顔を晒すのは敗者のみ。

賭けの対象とされ、勝者は連戦するため、その顔からどんな様子かをうかがい知ることはできない、というルールのようだ。

ほとんどの場合、勝者側は前の試合で引き抜かれたアナルビーズをそのままに、次の試合に挑まなければならない。だが、たまに入れ直しを行ってもらえる場合もあるみたいだ。

そのタイミングは司会次第。

フェアとかそんなのは関係なく、試合が面白くなるように調整されているんだ。

敗者はステージから降ろされ、尻壁場と呼ばれるエリアへ連れて行かれる。

そこで壁に頭や腕を突っ込まれて、抜け出せなくされた尻壁状態で設置され、試合が行われ

ている間、観客たちの玩具にされる。

ぴっちりスーツは脱がせてもらえないため、そこではひたすら、ハート型にくり抜かれた尻穴だけを犯されるのだ。

牝豚番号に０１９を振られた妹の佐奈も、早々にアナル綱引きに敗北して尻壁場送りにされてしまった。

少し離れたところから聞こえてくるいくつもの嬌声の中に、顔も見えない男たちに、次々と穴を掘られて、道具のように使われ喘ぐ妹の声も混じっていた。

その尻壁場だが、そこでしばらく弄ばれていると司会に選ばれ再びステージに上げられる。

さんざん尻穴を穿られ玩具にされた後の奴隷少女は、ガバガバになったアナルで二度目、三度目の綱引きを強いられる。

ショーの開始から時間が経ち、尻壁戻りのガバ穴奴隷が増えるほど短時間で勝負が決まるようになってくる。

そうして奴隷少女達のアナル綱引きサイクルが繰り返されるのだが、３回アナル綱引きに敗北した少女はこのサイクルから排除される。

３度負ければリーグ落ち。堕ちた先はNG無しのフリープレイ部屋、奴隷少女達を買う前に試すための試遊部屋へと連れて行かれるのだ。

そこに堕とされた牝豚は、もう今回のイベントが終わるまでは戻ってこれず、ひたすら全身

を男たちに思うがまま嬲られる。

ほとんどの奴隷少女は、最終的には試遊部屋堕ちにされるのだが、私達にも一つだけ救いが与えられている。

ある条件を達成できれば、今回のショーの凌辱対象から外され、ショーが終わるまでの間の休息が約束されている。

その条件とは、３０回連続でアナル綱引きに勝ち抜くこと。

今回のショーはその後の試遊部屋での凌辱を含めて５日間続くということなので、勝ち抜けばその間はプライベートルームが与えられ自由に身体を休めることができるわけだ。

恒久的に自由を与えられて開放される訳では無いが、奴隷に堕ちてから連日続くこの地獄から一時とはいえ逃れられる。

なんとしてでも、どれだけ無様を晒そうとも勝ち抜きたい。

その決意とともに、牝豚番号０６９番を振られた私、高藤加奈は一度目のアナル綱引き挑戦で１５連勝を果たし、開放までの道のりの半分を踏破してのけたのだった。

「んふうぅーーーーふうぅーーーーじゅるる、んじゅふうぅーーーんふうぅーーー」

そして今、唇の端から溢れる涎ごと、私は必死に空気を貪る。

喉まで詰め込まれたペニスギャグと、ぴっちりとしたスーツに鼻を封じられているせいで常

069

に軽い窒息状態にある。

そんな中、私はヒトイヌ姿で１５人もの奴隷少女達とアナル綱引きをして勝ち続けているんだ。

『なんとなんと、初出品の新星が１５連勝まで来ました！牝豚０６９番！これは強い、アナルが強い！期待の新人０６９番！』

いい加減、頭がぼぉっとしてきたわ…お尻の感覚もなくなり始めている…。

近くにいるはずなのに、司会の声が遠く聞こえている。

でも、やっと半分。

ここで諦めたら、次のチャンスはない。

一度でも尻壁場で男共の容赦ないアナルセックスに晒されて、アナルをガバガバにされてしまったら、アナル綱引きを３０人抜きするなんてきっと不可能だ。一度目の挑戦で３０連勝を成し遂げなければ、後はずるずると試遊部屋送りになるまで堕ちていくだけ。

最初で最後のチャンスを逃すまいと、私は必死の思いでアナルを締め続けていた。

とはいえ、腸内に残ったビーズは後２つ。

このままでは数回、下手したら次で全てのアナルビーズを引き抜かれてしまうかもしれない。

『１５連勝のご褒美です、ここでアナルビーズ再挿入チャンスッ！』

と思っていたら、予想外のご褒美。

これでまだ、戦える。

排泄穴の奥まで物を詰められる、そんな本来の人体の意図に反した卑猥な行為なのに、私は思わず嬉しくなってしまった。

「んほっ、おおおおぉぉぉぉん♡んほっ、おほおぉぉぉッ♡おっ、おっ、おおぉぉぉっ♡」

そんな状態でアナルビーズを8個も一気に再挿入されたら、喜びが口にも出てしまい媚びるような牝声が私の口からギャグ越しに次々溢れ出してしまう。

「ふぅぅーーーーーふぅぅーーーーー♡ふごっ……ッ、ひゅうぅぅーーーーじゅるる、んじゅるぅっ、ふぅぅーーーーふごっ！」

危うく絶頂しかけた。口からは喘ぎ声だけじゃなく涎もタラタラと溢れてしまうし、口から喉奥まで突っ込まれているペニス部分を無意識のうちに舌でペロペロと舐めてしまう。

初めは痛みしかなかった膣のバイブも、今ではそれが蠢く刺激も快感にしかならない。

今日はまだ媚薬を注射されたりしていないのに……。

奴隷にされて以降、男を喜ばせるために散々身体を開発されてきた成果がでてしまっている。

全身をギチギチ締め付けるぴっちりスーツに、視界も封じられて呼吸も制限され、ボディハーネスで上半身をギュウギュウと締め付けられ、手足を折り曲げられて犬のような四つん這い。

こんな状況なら、恐怖でパニックに陥ってもおかしくない。だが今の私は身体の拘束にも、尻穴を襲う刺激にも、言いしれぬ快感を覚えている。

酸素が足りなくて、頭がぼーっとしているのもそれに拍車をかけている。
流量を制限された状態で空気も鼻水も涎も一緒くたに吸い込む汚い呼吸を繰り返し、火照り悶える身体を宥める。
「ふもっ、おッ、ぶふうぅっ、んご、んごおぉ…ほひゅうぅ……」
時々鼻から空気を吸い込もうとしてスーツがひっつき、無様な豚声を上げてしまうが今はそれを気にしている余裕がない。
『さぁ準備も整い、次にこの強尻牝豚に挑むは、１度目の挑戦で１１連勝を成し遂げた！こちらもアナルが強い、尻壁戻りの淫乱牝豚０３６番！』
実況のコールで、次の相手が強敵だと知る。
だが、不思議と不安はなく、自信に満ちた尻穴がきゅんっと締まる。
この相手は一度負けて尻壁場で掘られた牝豚だ。
汚い親父共に使われた使用済みアナル奴隷に、私が負けるわけがない。
こんなところで一度しかないチャンスを逃すまいと、私はアナルを締めて迎え撃つ覚悟を決める。
「ふぅ……ふぅ……」
と対戦相手の準備が行われている間だけは、息を整えるために時間を使える。
この時間は、会場ではゲストたちが、どちらの牝豚が勝つかの賭けを宣言するタイミングで

もある。
この短い時間に、信じられないほどの大金が動く。
牝豚の番号だけではわかりづらいからか、私たちに装着されたボディハーネスの色でも区別される。
このボディハーネスは、簡単な操作で色が赤と青に切り替わるらしい。
今私の色は青だから、対戦相手の色は赤だ。
『賭け時間いっぱいで締め切らせていただきます。今回も０６９番、青のほうが優勢か』
連勝しているせいで、だいぶ私に賭けが集中しているみたい。
まったく…いいわよ、その期待に応えてあげようじゃないのっ！
『さぁさぁ両者見合ってぇぇ』
もとより、負けるつもりは毛頭ない。
肩と腰を少し下げて、構える。
『はじめぇ！！』

＊体験版はここまでです。続きは本編で。